



木曽川下流自然観察会

テーマ 「カワラという名がつく植物」

日時 2015年6月14日(日) 19:30~12:00(曇り)

参加者 一般:5名(うち子ども3名) 指導員:7名

河原は砂礫地で土壌が少ない、日射が強く高温になる、洪水で流されるなど、植物の生育にとって過酷な環境のため、山野に見られる植物とは別の河原に適した植物が見られます。そうしたものに「カワラ」という名のついた植物があります。今回はカワラマツバ、カワラサイコ、カワラヨモギの3種を見ようと南派川の高水敷を回りました。

堤防に向かう途中、タイサンボクの白い大きな花が咲いていました。せっかくなので花被のフルーティな香りを楽しんでもらいました。

堤防の階段を降りた辺りにアメリカネナシカズラが群生していました。黄色の細い茎がラーメンのように見えます。白い花や黄色の実もあり、ルーペで花を拡大して、花冠が5つに裂け、水平に開いていることを確認しました。

そこから少し先にナワシロイチゴとクワの実が熟していたので、参加した子どもたちに味わってもらいました。

河原の一角にお目当てのカワラマツバ、カワラサイコ、カワラヨモギの3種が揃って生えている場所があります。カワラマツバは花盛りですが、カワラサイコはもうすぐ花が咲くという状況(すこし行った芝生の中では花もありました。)で、カワラマツバは花茎が伸びつつあるといった状態でした。カワラマツバの花の匂いや、カワラヨモギの葉の匂いを嗅いでみました。

それにしても、この時期の植物の変化は早く、先月とはずいぶんとうすが変わっています。先月見たナヨクサフジはわずかに花が残っていましたが、もうほとんど実になっています。カラスノエンドウより小さく、カスマグサよりはやや大きな鞘です。また、ヒサウチソウも実になっており、割ってみると非常に細かな種子がたくさん詰まっていました。これだけたくさんの種子ができるなら、繁殖力が強いのもうなずけます。

大人が植物を見ている間も、子どもたちはモンシロチョウ、モンキチョウ、ツバメシジミ、ショウリョウバッタなどの虫を追って走り回っていました。子どもが参加すると観察会の雰囲気が変わりますね。

今回は中日新聞の「鳥虫花」の欄に観察会の案内が載ったので、その効果を期待したのですが、残念ながらそれを見て参加された人はいませんでした。ただ、前日の138タワーパークの観察会終了時に案内したことで、4名の一般参加がありました。マスコミよりロコミの方に効果があったようです。(報告:齋竹善行)

<その他観察できたもの> 花:オオキンケイギク、ヒメジョオン、クララ、コマツヨイグサ、シロツメクサ、ニガナ、ヒナキキョウソウ、ヒナギキョウ、ニワゼキショウ、セッカニワゼキショウ、コウゾリナ、クチナシ、イワダレソウ、ノアザミ、ハルジオン 鳥:ツバメ、オオヨシキリ(声)、ウグイス(声)、ホトトギス(声)、ホオジロ、ムクドリ、ヒバリ、スズメ、カワラヒワ、シジュウカラ 昆虫:キタキチョウ、ベニシジミ、ムラサキシジミ、クマバチ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、コオニヤンマ、コヤマトンボ、ショウジョウトンボ、



(カワラサイコ)



(カワラマツバ)



(観察会のようす)